平和交流活発 ブルガリアへ着任

竹田恒治新大使に抱負を聞く

民間主導のつながり重視

ブルガリアは近年、広島市の市民団体が原爆展を開催するなど、広島との草の根レベルでの平和交流が活発化している。着任を九月に控え、二十三日、広島市を訪れた、竹田恒治ブルガリア大使(63)に平和への思いなど抱負を聞いた。

―今回、広島、福山、岡山市を訪問した目的は何ですか。

福山市はバラを通じてカザンラク市と交流を続け、岡山市はプロブディフ市と姉妹縁組を結んでいる。また、広島市民は昨年から現地の地方都市で被爆の実情を伝える原爆展を続けている。政府主導でなく、民間レベルで友好に尽くす人たちの声を聞き、息の長い交流をお願いするとともに、資料提供など、できる限りの協力をしたいとの思いを伝えに来た。

―ブルガリア側から見たヒロシマの印象はいかがですか。

ブルガリアは約五百年間、トルコの支配下にあり、第二次世界大戦では枢軸国側に付いて敗北。その後、共産主義国として冷戦時代を過ごし、平和への思い入れがとても強い。戦後、経済発展し平和を守り続けている日本に敬意を抱いている。八月六日に首都ソフィアでは平和行事が開かれている。一昨年は日本政府の招待で広島の原爆資料館や被爆者を取材した民放局のドキュメンタリー番組が反響を呼ぶなど、ヒロシマへの関心も高まっている。

―被爆国の大使の役割をどう考えますか。

広島には何度も来た経験があるが、そのたび悲しい歴史を思い出し、平和について考える。唯一の被爆国として、平和のメッセージを世界に発信する任務があるのだと実感する。さまざまな機会をとらえ発信していく。

―友好を深めるため、何に力を入れますか。

新しい取り組みとして民間企業の投資や貿易などを進め、経済分野の協力関係を構築したい。特に自動車関連企業に期待している。両国はすでに文化、スポーツなど多分野でつながりがあるが、心のこもった市民の交流は友好関係を築く上で最も重要。大使館がメーンプレーヤーとして動くだけでなく市民交流の橋渡し役となり、官民一体で友好を促進したい。（森田裕美）

「愛情のこもった、人と人との交流を大切にしたい」と話す竹田大使（撮影・今田豊）

たけだ・つねはる　東京都出身。1967年に伊藤忠商事に入り、大洋州総支配人や理事などを経て、2007年6月まで中央設備エンジニアリング社長。8月7日付でブルガリア大使に任命された。